Card Magic Magazine

No. 8 December 2, 2012 by Hideo Kato

© Hideo Kato 2012 年 12 月 2 日

Thirty Card Mystries

= 第 6 回 =

19. パックザットカットイットセルフ

= The Pack That Cut Itself =

＊現　象＊

借りたデックから客が 1 枚のカードを選びます。デックのまわりに輪ゴムを 3 本か 4 本かけてから、中央で分けて、そこへ選ばれたカードを返させます。デックの表面を相手の方に向けて持ちます。フェースカードは選ばれたカードではありません。そのままの向きでパックを空中に投げると、何とデックは空中でカットして、フェースに選ばれたカードが現れます。輪ゴムはまだしっかりデックのまわりにかかっています。輪ゴムを外して、そのままデックを持ち主に返します。

＊準　備＊

このトリックに使われた原理は、多くのマジシャンによって発見されたかもしれませんが、いまのところ聞いたことも読んだこともありません。

デックを借りるまえに、自分のデックから 1 枚のカードを左手にパームしておきますが、表面を手の平に向けてパームします。スペードの9であるとします。デックを借りたら、カードの枚数を確認する振りをして、その中にあるスペードの9をいちばん下（バック）に運びます。

そのスペードの9をフォースします。客がそのカードを他の客に見せている間に、つぎの重要な操作を行います。3 本か 4 本の輪ゴムをデックに横向きにかけたあと、カードをそろえる振りをして、デックの中央あたりでカットして、上半分を 360 度ねじり、それから上半分をページを開くように右に起こし、それを他方の半分の下側にまわします。

いま右手の指先は前のエンドにかかっています。そこで上半分のボトムカード（あなたが加えたスペードの9）を落とし、落としたカードの上に、相手が選んだカードを入れて、中に押し込んで他のカードとそろえます。

デックの表面を相手の方に向けて持ちます。フェースには選ばれたカードではないカードが見えています。デックを空中に投げ上げてから、それを受け止めます。デックは空中で半回転して、選ばれたカードのデュプリケートカードがフェースに出ますので、それを相手に見せて選ばれたカードであることを確認します。輪ゴムを外しながら、フェースにあるデュプリケートカードをパームして処理します。

＊訳　注＊

説明の最後の部分を読んで、なぜデュプリケートカードを使う必要があるのかと思いましたが、選ばれたカードをねじれた輪ゴムの下に直接入れることはできないからだと、あとからわかりました。

輪ゴムの大きさや強さによって、何本必要かが違ってきます。私は 2 本ではうまくいきませんでしたが、3 本ならできました。

ジョーダンの説明では上半分を 180 度ねじると勘違いするような書き方がされていて、その通りにやってみると、たんに上半分が水平にまわるだけで、フェースカードが変わるような回転は起こりませんでした。

カール・ファルブズは、360 度回転させればできることが気づかなかったかも知れません。彼の "Best Card Tricks of Charles Jordan" では、このトリックは収録されていませんでした。

難度C

= 加藤英夫、2012 年 2 月 9 日 =

前述の ' パックカットザットイットセルフ ' を読んで、相手がカードを他の客に見せている間に、上記の操作を行うことは、気づかれずに行うことはとてもできないと思いました。私はむしろつぎのように堂々とやってもよいと思い、しかもデュプリケートを使わないでできるように、このバリエーションを考えました。

＊方　法＊

選ばれたカードをボトムにコントロールします。それから輪ゴムをかけて、「いまからゼンマイを巻きます」と言って、2 回ねじります。それから半分を反対へまわします。そしてデックの裏表をよく見せてから、空中に放り投げます。あとは選ばれたカードを見せて、輪ゴムを外します。

＊備　考＊

選ばれたカードの代わりに、4 枚のAをマルティプルシフトでボトムに集め、それから 4 枚のAを現すというトリックとすれば、十分現代でも演じる価値のあるトリックになると思います。

20. インポシブルジャーニー

= The Impossible Journey =

＊現　象＊

このささやかなトリックは、テクニックのある人が演じれば、つねに人の興味をかきたてるものです。借りたデックから 1 枚のカードが自由に選ばれ、それを客が見ている間に、マジシャンはデックに横方向に輪ゴムをかけます。

客がデックの前エンドから、選ばれたカードをデックの中に入れます。トップにもボトムにも選ばれたがないのが見せられ、さらにもう 1 本の輪ゴムが縦方向にかけられます。あらかじめ抜き出してあったジョーカーで魔法をかけたあと、客が輪ゴムを外すと、選ばれたカードはトップから現れます。これは潜水艦の話がマッチします。デックが海で、ジョーカーが探知機で、それによって潜水艦が浮かび上がった、というような話です。

＊方　法＊

このトリックの肝（きも）は、輪ゴムをデックに横方向にかけるときに、パスによって中央に入れた選ばれたカードをトップに運んでしまうということです。輪ゴムをかける動作によって、パスの動作も音もカバーできるのです。

選ばれたカードをデックの中央に返してもらったら、そのカードの上にブレークを保持します。そして 1 本目の輪ゴムをかけるときに、パスによってトップに運びます。それからボトムカードを見せ、そしてトップの 2 枚の前エンドを持ち上げて、ボトムにも選ばれたカードがないことを見せます。そして縦方向にもう 1 本の輪ゴムをかけます。

そして現象に説明したように演じます。

21. アワフレンズ、フォーエース

= Our Friends, The Aces =

＊現　象＊

デックから 4 枚のAが抜き出され、表向きにテーブルに並べられます。ジョーカーは取り除かれす。4 枚のAがデックのトップに置かれると、クリッという何か怪しげな音がします。マジシャンはトップから 4 枚のカードを裏向きに並べますが、観客はAではないと疑います。そこでマジシャンはたしかにAであることを見せます。そして客に 1 枚ずつデックのトップに置かせます。

こんどは片手でトップの 4 枚を裏向きに並べます。そのあとそれぞれのAの上に 1 枚ずつカードをのせていき、さらに 1 枚ずつのせていき、合計 3 枚ずつAの上にのせます。

4 組の山のうち 1 組が選ばれ、わきに置かれます。残り 3 組の上から 3 枚ずつ取ってデックの上に戻され、3 枚のAは 1 枚ずつ見せながら、デックのボトムに置かれます。それからデックのカードをすべて見せますが、Aはどこにもありません。

当然、わきに置いてある組に注目が向けられます。そこでマジシャンがその組のトップカードを表向きにすると、何とそれはジョーカーになっています。最初に除外されたジョーカーであるはずのカードを表向きにすると、何とそれはスペードのAになっています。

つぎにわきに置かれたパイルの 2 枚目のカードを取ります。するとそれもジョーカーになっています。マジシャンはあと 2 枚を表向きにしますが、全部ジョーカーです。

「いったいジョーカーが何枚あるんでしょう」と言って、マジシャンはデックの表を観客に向けて広げます。「1 枚もありません」と言います。「きっと幻覚ですよ。1 組の中にはジョーカーは 1 枚で、4 枚あるのはAなんですから」と言って、ジョーカーだと思われている 4 枚のカードを表向きにすると、それらは 4 枚のAになっています。そして 1 枚だけのカードがジョーカーになっています。

＊準　備＊

デックには、4 枚のジョーカーとエクストラのスペードのＡ 1 枚が必要です。トップから、ジョーカー、エクストラのスペードのA、1 枚の無関係のカード、ジョーカー、3 枚の無関係カード、ジョーカー、3 枚の無関係カード、ジョーカーとセットし、4 枚のAはこれより下に分散させておきます。

＊方　法＊

デックを表向きに広げていき、分散させてある 4 枚のAを抜き出して、テーブルに表向きに並べていきます。そしてデックを裏向きに左手に持ち、右手でトップのジョーカーを取って見せます。それをスペードのAとトップチェンジして、テーブルに置きます。

4 枚のAを裏向きにデックのトップに戻します。そして怪しげにデックをリフルして音をたててから、トップの 4 枚を裏向きにテーブルに置きますが、「怪しいですか。では表向きにしてください」と言って、客に 4 枚のAを表向きにさせます。そのときトップのジョーカーをパームします。そして客に 4 枚のAをデックのトップにのせさせますず、最初にスペードのAから置かせます。2 枚置かれたところでカードをそろえる感じで、パームしているジョーカーをトップに加えます。その上にあと 2 枚のAを置かせます。

それからトップの 4 枚を裏向きに一列に並べます。さらに、各パイルが 4 枚ずつになるまで、ディールを続けます。3 番目のパイルが 4 枚のジョーカーとなります。1 枚のスペードのAは 1 組目の下から 2 枚目にあります。あとの 3 枚のAは、1 組目、2 組目、4 組目のそれぞれボトムにあります。3 組目を例の方法でフォースて、その組をわきに置きます。

右の組から左の組に向かって、上から 1 枚ずつ取ってデックの上に置いていきます。そのようにして各組から 3 枚取ると、いちばん上はスペードのAとなります。それから 3 枚のAをデックのフェースに置きます。

デックを裏向きに持ち、ボトムの 4 枚をリフルして落とし、その 4 枚をパスでトップに運びます。デックの手前エンドを持ち上げて、いかにも 1 枚だけ持ち上げる振りをして、4 枚のAを含んだ 5 枚を持ち上げます。その 5 枚の下にブレークを作り、いちばん上の関係ないカードだけを右手で取り上げ、右手を返して表を見せ、「ここにはAはありません」と言います。右手のカードをトップに戻します。

続けてブレークを保ったままデックを右に表向きに返し、「ここにもAはありません」と言います。フェースの 1 枚を右に引いて右手に取り、フェースから 2 枚目を見せて「ここにもありません」と言います。現在のフェースカードを右手のカードの上に引いて取ろうとしたとき、右手の中指を思い切り伸ばして、ブレークの下の 5 枚の左サイドに当てて、フェースカードとともに右手に取ってしまいます。その 5 枚は、フェースの 1 枚目と 2 枚目にはさまれることになります。

続けてフェースからカードを取り続け、全部そのように取り、Aが消えたことを見せます。そのあとデックを裏向きに持ち、トップの 2 枚をパスでボトムにまわします。4 枚のAがトップに位置します。

つぎに 4 枚のパイルのトップカードを右手で取って表を見せます。それはジョーカーです。それをトップのAとトップチェンジしてテーブルに置きます。それからわきに置いてあったジョーカーと思われているカードを表向きにします。それはスペードのAになっています。それをトップチェンジしてもとの位置に置きます。

残りの 3 枚を 1 枚ずつジョーカーになっているのを見せ、それをボトムチェンジによってAにすり替えてテーブルに置いていきます。3 枚のジョーカーがボトムにあることになります。それらをパスでトップに運びます。するとトップにはその 3 枚のジョーカーとスペードのAが集まります。その 4 枚の下にブレークを作り、右手でテーブルの 4 枚のAを表返しにいくとき、左手を胸ポケットの上に位置させて、親指でトップの 4 枚を押して胸ポケットの中に落とします。最後に 1 枚のジョーカーを表向きに返します。

22. リーヴイットトゥーエーセズ

= Leave It to Aces =

＊現　象＊

借りたデックから 4 枚のAを抜き出します。選ばれたカードがデックに戻されたあと、客が 4 枚のうちの好きなエースを指定します。そしてAをバラバラにデックの中に入れると、客の指定したAが選ばれたカードを見つけます。すなわち、そのAの隣りに選ばれたカードがあるのです。

＊方　法＊

このトリックを演ずるには、ダイアゴナルパームシフトをマスタしている必要があります。その技法はアードネスの〝エクスパートアットザテーブル〟に解説されています。

4 枚のAを抜き出して、表向きにテーブルに並べます。それから 1 枚のカードを選ばせ、おぼえてからデックに変えさせますが、何らかの方法でトップにコントロールして、そのあとシャフルしてもトップに保ちます。

客に好きなAを指定させ、そのAをデックの適当なところにさし込ませます。あなたはそれを押し込んでダイアゴナルパームシフトでボトムに運びます。あと 3 枚のAを適当なところに入れさせます。そのあとデックをカットすれば、選ばれたカードは指定されたAの隣りにくっつきますから、その結果を見せます。

23. ファントムエーセズ

= The Phantom Aces =

＊現　象＊

デックから 4 枚のAを抜き出して、表向きで 4 枚を赤黒交互に並べます。その状態をしっかりと見せてから、4 枚を裏返して左手に持ち、上から 1 枚ずつ色を言いながら、右手に取っていきます。もちろん全体の順は逆順になります。それから 4 枚を広げて、客に同じ色の 2 枚を抜かせますが、客は違う色のAを取ってしまいます。繰り返して、やはり違う色のAを取ってしまいます。

＊方　法＊

このトリックの秘密は、カードを左手から右手への取り方にあります。左手の指先をまっすぐ左に向け、その指先に 4 枚をのせます。両手は少し体から離し、ややカードの裏面を観客の方に倒して行うようにします。

右手の親指をトップカードの裏面に当て、右方に引いて右手に取りますが、そのとき左親指もカードを押し出すのに参加します。右手に取ったら、ほんの少し両手が離れる位置まで運びます。2 枚目を取ろうとして、右親指を上げて、手の平にバランスさせたカードは左手の下に運びます。そして 1 枚目の上に 2 枚目を引いて取ります。

3 枚目を取るべく両手を近づけますが、右手のカードを左手の下に運ぶのではなく、左手の 2 枚のカードと左手の指の間にすべり込ませます。カードがそろったら、右では上の 3 枚をつかみ、左手で押し出すのを手伝って、その 3 枚を右方に運んで取ります。

左手に残っている 1 枚を右手の 3 枚の上に取ります。

そのように 4 枚のカードを 1 枚ずつ左手から右手に取ったように見せるとき、「赤、黒、赤、黒」と、最初に見せた順にしたがって言いながら行います。

客は色が交互になっていると思っていますが、実際は同じ色が 2 枚続いています。客は隣り同士のカードを取ろうとしないので、同じ色のAを取ることができないのです。

＊訳　注＊

これがかの有名な、ジョーダンカウントが最初に文献に現れたものです。エルムズレイカウントが発表された時点では、このカウントの存在は埋もれていました。この技法の存在がクローズアップされた経緯は、″Card Magic Library″ 第 2 巻、44 ページに詳しく解説されています。

今日の発見

= 第6回 =

No.018　オールバック / オールフェイス

投稿日：2007 年 10 月 15 日

雑誌 ″ ヒューガードマジックマンスリー ″1949 年 6 月号に、有名なダイ・バーノンの ' オールバック ' の最初のバージョンが解説されています。編集者のジーン・ヒューガードは、それがヒューガードが 10 年ぐらいまえに発売したもののバリエーションであると述べています。すなわち、' オールバック ' の原案者はヒューガードであるということです。

スティーヴン・ミンチは、″Collected Works of Alex Elmsley″ の中で、ヒューガードのそのトリックの広告が、雑誌 ″ スフィンクス ″1930 年 1 月号に出ていると指摘しています。ミンチはさらに、ヒューガードバージョンが、1920 年代に発売された、ラルフ・ハルの 'NRA Deck' に影響を受けていると述べています。

さて、今日のおたずねしたいことは、' オールバック ' に対して、' オールフェイス ' の概念を最初に発表したのは誰かということです。

カーティス・キャムさんの投稿（2007 年 10 月 15 日）

加藤さん、少なくともエドワード・マルローは、″ カーディシャン ″ か ″ ハイエロファント ″ の中で、'The Wrong Deck' というタイトルで、オールフェイス現象のトリックを書いています。

加藤の投稿（2007 年 10 月 15 日）

キャムさん、オールフェイスについての回答有り難うございます。両方調べましたが、どちらにも 'The Wrong Deck' のタイトルで解説されていました。その作品では、オールバックの現象とオールフェイスの現象が演じられます。

加藤の投稿（2007 年 10 月 17 日）

雑誌 ″ ジニー ″1957 年 3 月号の中に、オールバックの現象を、ヒューガードやバーノンのやり方と違うやり方で実現している、チャールズ・ナイクイストの 'Let's Face It' を見つけました。やり方の概略はつぎの通りです。

デックの下半分をひっくり返してフェーストゥーフェースの状態にします。中央より少し手前までオーバーハンドシャフルして、そこで残りの全部を左手で取ると同時に、いままで取ったカードを右手に全部取り、最後までシャフルを続けます。いかにも全部をシャフルしたように見えます。デックをひっくり返して同じことを行うと、両面とも裏のように見えます。

私がこれを読んで思いついたのは、中央にシックカードを置いておくということです。そうすればデックの中央を感触で判断することができます。

ナイクイストは、デックのちょうど中央でカットもしくはパスすればも、オールフェイスの現象も見せられると書いています。

No.019　破かれた予言

<u>投稿日：2007 年 10 月 18 日</u>

今日、私が思いついたアイデアを記録しておきます。面白い予言の方法ですが、予言の言葉が 16 文字である必要があります。

あなたは予言として、4x4 のマスに 1 文字ずつ、合計 16 の文字が書かれているのを見せます。文字はランダムに並んでいるので、意味がわかりません。

ここで相手に 1 枚のカードを選ばせ、おぼえてからデックに返させ、デックをシャフルします。予言の紙を取り上げて、半分に切り、切ったのを重ねてさらに半分に切ります。そのように続けて、16 の断片とします。その断片を順番に並べると、″It is 10-th from top″ となります。客がカードを数えてディールすると、10 枚目から選ばれたカードが現れます。

枚数目を表現する以外に、英語でうまい 16 文字の言葉があるかどうかわかりませんが、日本ではぴったりの言葉が見つかりました。それは、「あなたのカードはハートのクイーン」というものです。

補　足

投稿したのはアイデアだけで、詳しくやり方を書きませんでした。つぎのようにやってください。カードはハートのQをフォースして、裏向きのまま置かせます。

紙は破りやすいものを使います。文字が透けても問題ないので、薄いものを使ってもかまいません。右図のような文字を書いて置きます。

の	は	た	ド
の	ン	ト	ー
な	ー	あ	カ
ー	イ	ハ	ク

上記の現象の通りに進めて、予言を破くところから説明します。表を観客の方に向け、しかも文字の向きがちゃんとした向きに向くように持ちます。

中央から縦に破ります。左手の半分を右手の半分の手前に重ねます。そうしたら、時計方向に 90 度まわします。そしてまた中央から半分に切り、左手のを手前に重ね、時計方向にまわします。あと 2 回同じ法則で破ります。最後も時計方向にまわして終わります。

重ねた断片を手前に返して表向きにして、右手前から左に向かって 4 枚を並べると、観客から見て、「あなたの」となります。

一列目の前に (観客寄りに)、つぎの 4 枚を並べます。「カードは」となります。さらにその前につぎの 4 枚を並べます。「ダイヤの」となります。その前に最後の 4 枚を並べます。「クイーン」となります。選ばれたカードを表向きにします。

No.020　ツインソウル

投稿日：2007 年 10 月 19 日

私は若いころ、ジーン・ヒューガードの "Encyclopedia of Card Tricks" を読みました。私は今日、また同書を読み直す決めました。そうすれば、若いころには思いつかなかったアイデアを見つけられると思うからです。

同書の最初に解説されているのが、アル・ベイカーの ' ツインソウル ' です。そのタイトル

には、〇印をついています。それは読んで私が面白いと思った印です。

今日また読み返して、ひとつの部分がウィークポイントであると思いました。少なくとも私の志向においては。

1 人目の客がカードを選んだあと、マジシャンはデック見渡してから、カットするという部分があります。その部分でヒューガードは、

〝予言するカードを決めるような演技で、表を自分に向けてデックを広げ、最初のボトムカードを見つけて、それがボトムになるようにカットします〟と書いています。

その動作が怪しさを発生すると思うのです。私は予言を書く代わりに、選ばれるカードと同色同数のマッチングカードを抜き出して、それを予言の代わりにしたらどうかと思いつきました。

したがって、1 人目にカードを選ばせるまえに、表を自分に向けてカードを広げ、トップカードにマッチするカードを抜き出してテーブルに裏向きに置くのです。そして 2 人目の客に選ばせるまえに、また表を自分に向けて広げ、最初のボトムカードからカットして、トップカードになったカードとマッチするカードを抜き出すのです。

私はそのようにやることが、デックを見渡すことに正当性を与えるだけでなく、マッチングカードを表向きにして当たっているのを見せるのが、ビジュアルな終わり方になると思います。

以上のように投稿いたしましたが、現時点では、私のアイデアが優れているということに自信がありません。多分マジシャンではない人にとっては、マッチングカードより、文言で書かれた予言の方がよいと思います。参考のためにベイカーの原案を翻訳しておきます。

ツインソウル

= アル・ベイカー、〝エンサイクロペディアオブカードトリックス〟(1937 年) =

客にデックをよくシャフルさせます。それを受け取るときにボトムカードをグリンプスします。オーバーハンドシャフルしてそのカードをトップに運び、新しいボトムカードをグリンプスします。

女性客に向かって、「あなたがこれからやることの予言を書いておきます」と言って、紙を取り出し、それに「男性の方は〇〇の××を選びます」と、現在のトップカードの名前を書きます。その紙をたたんで、テーブル上のグラスなどの下にはさんでおきます。

女性客にデックを渡し、あなたは後向きになります。彼女に好きな数を思ってもらい、その数だけテーブルにディールさせ、最後のカードをのぞいておぼえてもらいます。残りのカードをテーブルのカードの上に重ねてから、デックをカットしてもらいます。

前に向き直り、デックを受け取り、こんどは男性客に向かいます。予言するカードを決めるような演技で、表を自分に向けてデックを広げ、最初のボトムカードを見つけて、それがボトムになるようにカットします。そしてトップカードになったカードをグリンプスします。それは女性客がおぼえたカードです。

紙を取り出して、「女性の方は○○の××を選びます」と、トップカードの名前を書きます。紙をたたんで最初の紙と重ねて置きます。

ここで女性客に、彼女が思った数を男性客に耳元でささやかせます。デックを男性客に持たせ、ささやかれた枚数をディールさせ、最後に置いたカードをのぞいておぼえてもらいます。残りのカードをその上に重ねて、そのあとはデックをシャフルさせてもかまいません。

あとは予言の紙を取り上げ、男性と女性用の予言をすり替えて渡し、それぞれのカードを名乗らせてから、予言の紙を開いて読ませます。当たっています。

カードマジック徹底研究

エイトカードブレーンウェーブ Part 6

今回は、’エイトカードブレーンウェーブ’徹底研究の最終回として、私がこの研究によって得た、もっとも演じる機会が多いことになるであろう、2 つ作品を紹介して締めくくります。

レッドオイル＆ブルーウォーター

= 加藤英夫、2012 年 4 月 9 日 =

＊準　備＊

赤裏のカードを 5 枚、青裏のカードを 5 枚使います。5～9までの黒い数のカードを使います。同じカードはないようにします。赤裏の方に5～9までとしますが、マークは 2 枚と 3 枚にします。青裏の方は残りの 5 枚となります。

すべてのカードを通常のストリッパーとは違う、横方向に抜くストリッパーとします。そして裏向きの赤裏 5 枚の上に、裏向きの青裏 5 枚を重ねます。赤裏と青裏は方向違いとします。

＊方　法＊

10 枚を裏向きに広げて、青裏の 5 枚と赤裏の 5 枚があることを示します。それらをそろえるとき、下から 2 枚目の上にブレークを作ります。右手でパケットを上からビドルポジションにつかむとき、左指先でいちばん下のカードを右に押して、サイドジョグします。

声を出して数えながら、左手につぎのように取っていきます。1 枚目を左手で引いてふつうに取り、2 枚目を取るとき、サイドジョグカードをいっしょに取ります。3 枚目を取るとき、ブレーク下の 1 枚をいっしょに取ります。そして取った 3 枚目の下にブレークを作ります。4 枚目を取り、5 枚目を取るとき、ブレーク上の 2 枚を右手のカードの下にスチールバックします。

「こちらは青いカードです」と言いながら、左手の 5 枚を表返してテーブルの少し左の方に置きます。「残りは赤いカードです」と言って、表向きにテーブルの少し右の方に置きます。

「青裏のカードが青い水で、赤裏のカードが赤い油だとします。ふつう水と油は比重が違うので、混ざることがありません。ところが赤い油はほとんど比重が見ずと同じです。そんな水と油をいっしょにすると、どんなことになるか実験することにいたします」と話します。

「このように水と油を離しておくと、混ざることはありません。確かめておきましょう」と言って、左

のパケットを取り、オルラムサトルティで全部青裏であることを見せます。つぎに右のパケットを取り、オタックサトルティで全部赤裏であることを見せます。

「水と油をいっしょにします」と言って、一方のパケットを他方のパケットの上に重ねます。どちらを上にしてもかまいません。「しばらくすると、比重が同じなので、水と油がまざります」と言って、少し間をおいてから、10 枚を表向きのまま取り上げます。そして上から 1 枚ずつ裏返してテーブルにオーバーラップさせて置いていき、赤裏と青裏が混ざったことを見せます。

カードをそろえ、表向きにして上から 5 枚を広げて右手に取り、それらをそろえて表向きに右に置きます。残りをそろえて左に置きます。

「このように 2 組に分けると不思議なことが起こります」と言ってから、一方のパケットでオルラムサトルティして、5 枚の裏が同じ色であるように見せます。「ほら、こちらは全部水 (油) になっています」と言います。他方のパケットでオルラムサトルティして、5 枚のカードの裏が同じ色であるように見せます。「こちらは全部油 (水) になっています」と言います。

2 つのパケットをまた重ね、重ねたらすぐ裏返します。「じつはいっしょにするとすぐ混ざるんです」と言ってから、10 枚を裏向きにリボンスプレッドして、一気に混ざったことを見せます。

カードをそろえ、ストリッパーの機能によって横方向に分け、2 組のパケットをテーブルに置き、「もちろん、2 組に分けると、すぐ分かれてしまいます」と言って、それぞれをリボンスプレッドして、分かれたことを見せます。「きりがないので、このぐらいにしておきます」と言って終わります。

＊備　考＊

第 2 段の分離したところで終わった振りをして、カードを重ねてしまったので、また混ざってしまった、というところで終わりにすれば、ストリッパーの仕掛は不要となります。

名士の名刺

= 加藤英夫、考案日不明 =

マジックの価値というものは、原理の素晴らしさや、テクニックのすごさや、仕掛の巧妙さにあるのではありません。それは、マジックを人に見せてどのように素晴らしい印象を与えられるかという、使い方にあるのです。コミュニケーション手段として最高のカードマジックです。

8 枚の名刺用の紙片を見せ、その中から相手に 1 枚選ばせます。残り 7 枚の両面を見せると、すべて白紙です。選ばれた紙片をひっくり返すと、それは自分の名刺になっています。

やり方は、このシリーズをお読みいただいた方ならおわかりになるはずです。ご活用ください。

マジックカフェの宝物

= 第１回　フォースしたそのあとは？ =

マジックカフェで、2012 年 8 月 2 日につぎのような投稿がありました。

LockStock

クラス会でテーブルをまわってマジックをやってくれと頼まれているのですが、私はフォースのやり方をマスターしているので、フォースしたカードを現すのに良いアイデアはないかと考えています。デュプリケートカードをあらかじめ友達のポケットに入れておくとか、マットの下に入れておいて、それらから現すなどというのもやってみようと思います。何か他に良いアイデアはないでしょうか。

通常、このような機会で演じる演目を考えるとき、技法を出発点にすること自体が良いとは思えません。テーブルをまわって演じるというのに、何人もの友達のポケットにカードを忍び込ませたり、マットの下に入れるなどというのは、状況をとらえて考えているとは思えません。

このような投稿に対しては、意見を投稿するのは様子見するのが私の定石です。案の定、トンチンカンな回答が寄せられ始めました。しばらくすると、傾聴に値する意見も出てきました。

iterpa1

私の経験では、デュプリケートカードは、質問者があげたデュプリケートが使われたと思わたらお終いのようなやり方で使ってはなりません。もしも友達のポケットからデュプリケートカードを現したとしたら、それは最初のとは別のカードだけだと思われるに違いありません。

MagicJuggler

私もデュプリケートを、ポケットやマットの下から現すというのはよくないと思います。そのようにフォースというものは、フォースの働きだけで現象を生み出すものではなく、たとえばフォースしたカードを破いて復活させるなど、メインの現象をフォースによって強化することに使う、といった使い方をした方が効果的です。

Adam Chance

ダイヤの８をフォースします。１本の針金を見せ、魔法をかけるとそれが曲がって、ダイヤの８の形になります。これはフォースしたカードの現し方として優れています。なぜなら現し方自体がマジックになっているからです。

以上の２つの回答を読んで、フォースの効果的な使い方は、メインの現象に使うのに、自由に選ばれたカードを使ったように見せる、ということが典型的なものだと思い当たりました。

もちろん、フォースしたカードを念じさせて、それをサイキックに当てるとか、カードケースからデュプリケートを現すなどのダイレクトな使い方も投稿されました。

カードをフォースしたあとどのように現したらいいか、という質問投稿者の質問自体が、優秀な回答を引き出すものではなかったのか、そのあと有意義な回答は見られませんでした。しかし私はこのスレッドを読んだおかげで、たいへん面白い演出の作品を思いつきました。

忘れてきた予言

= 加藤英夫、2012 年 8 月 5 日 =

＊準　備＊

1 枚のカードの表面に、″このカードが選ばれる″と書いておきます。余白の多いカードを使います。このカードをデックのボトムにセットしておきます。

＊方　法＊

予言を書いたカードをクラシックフォースして、表を見ないでテーブルに置かせます。

デックを表向きにテーブルに広げ、よく広げて見せながら、「あなたはこの中かから自由に 1 枚のカードを選びました。どのカードが選ばれるか私は予言を用意しておきました」と言って、ポケットに手を入れますが、「あれっ」という表情をして、空の手を出します。他のポケットを探る演技のあと、「最近物忘れがひどいんです」と言います。

それから思い出したような顔をして、「思い出しました。予言はここにあります」と言って、フォースしたカードを指さします。そしてそのカードの表を見せ、「ほら、″このカードが選ばれる″と書いてあります。予言が当たりました」と言って終わります。

＊備　考＊

これだけ優れた演出を思いつくと、クラシックフォースのように、少しでも失敗の可能性のあるフォースではなく、ギャフを使ってでももっと効果的なフォースを使う価値があると思います。

ラフ＆スムーズを使えば、裏向きで広げて１枚を指さ させて自由に選ばせられますし、他のカードの表面に何も書かれていないのが見せられます。先日のレクチャーでは、’エイトカードブレーンウェーブ’のやり方でこの演出を演じました。すごく受けました。

後日談

No.３　マジック（笑える）パラドックス

デジタル版で発行した "cardmagic@ransdom.007" の中の、上記表題のコラムを読んで大笑いしてしまいました。たいへんよいことが書いてあるので、ぜひ再録したいと思いました。再録するだけでは能がないので、いくつか追加することにいたしました。

種明かしをしてはならない

種明かしをした方がよい場合もある。こわい顔つきで「教えろ」とせまられたとき。でもたいていの場合、「そんなことでだましやがって」と逆に怒られるので、要注意！

同じマジックを繰り返さない

繰り返した方がよい場合もある。いちどでは何をやってるかわからないようなマジックは。

あらかじめ説明しない

あらかじめ説明した方が観客のためになることがある。知っているマジックなら見なくてよいから。

ビーナチュラル

マジシャンのふだんの身振りを知らないのに、何が自然なのか観客にはわかるわけがない。

一に練習・二に練習

練習すると悪い癖をつけることがある。たいていのマジシャンがこれに属している。（これって、すごく的を得ているような気がする）。

舞台に出たら、すぐに現象を見せよ

あわててつまらない現象を見せたら逆効果だ。

ミスディレクション

いくら左手に注目を集めても、右手が体の陰に隠れたのは見え見えだ。

ビーナチュラル エルムズレイカウント編

右手から左手にカウントすべきか、それとも左手から右手にカウントすべきか、左利きの私にはどちらがナチュラルなのでしょう。（私を信じなさい。そんなことはどうでもよいことだ）。

ポーカーサイズ VS ブリッジサイズ

ジェニングスが言ったからといって、信ずる必要はない。彼の手は加藤の手よりもずっと大きかったのだ。だいたい、はみ出るより、はみ出ない方がいいに決まっている。こんなことで議論をしてはならない。（ただし手の大きい人は、ポーカーサイズを使った方がよいことは不滅の法則）。

ビーナチュラル その3

しゃべるときの声の大きさをビーナチュラルとしたら、とても客には聞こえない。動作だって同じこと。誇張することが結果として、ナチュラルになることもあるのだ。このことが身についていないクロースアップマジシャンが多い。〞私は声を大にして言いたい〞。この声の大きさを参考にしてほしい。

ビーナチュラル 総集編

トリックを知られたくない部分を隠すにはビーナチュラルかもしれないが、演技として強調する部分はナチュラルじゃダメなんだ。フラリッシュを使うなといった先人もいるけれど、「すごいテクニシャンだ」という暗示を与えられるなら、そんなことを気にする必要はない。マジシャンは強調とナチュラルの使い分けが必要なんだ。（ずいぶんレベルの高い話になってきたぞ）。

マジックはコミュニケーションの道具

これがいちばん問題だ。成功したときと失敗したときの落差が激しい。くれぐれもTPOに気をつけよう。デートでマジックを使う方法を書いた人がいるが、本人がどこかで本音を語っている。「私はマジックで女性にもてたことはない」と。（それって、先江進とかいう人じゃない）。

マジックは言葉の壁を越える

そのとおり！ つまらないマジックは、世界中の人にバカにされる。

つねに新しいマジックを、つねに新しい見せ方を

観客は新しいものと古いものを区別できるのだろうか。本当に磨かれたものだったら、古い

ままでもよいのではないだろうか。（これは新しいものばかりを追う傾向への、著者の真摯な問題提起である）。いま比べても、チャニング・ポロックを越える鳩はない。フレッド・カップスを越える塩はない。加藤を超える包帯はない。

マジックがテレビで大人気！

テレビでマジックの視聴率が上がったからといって、マジックのレベルが上がったことになるのだろうか。一般大衆の興味が強まっていることは違いない。その大きなチャンスに質の高いものを見せないと、早晩この高まりは沈静化していくに違いない。いまこそチャンスであり、危機でもあるのだ !!!

このコラムを読んで笑った方へ

これらのことは笑ってすむことではありません。お互いに真剣に取り組みましょう。

（ここから先が追加です）

鏡は師である

そんなことはあり得ない。鏡を見ているのは自分なのだから。

パスは 1 秒に 100 回できるぐらい鍛錬せよ

そんなことをしたら正しいやり方が身につくはずがない。丸見えのパスが身につくだけだ。

サーストンは舞台に出るまえに「私は人々を愛している」と唱えた

出るまえだけではいけない。いつでもそのように思っていることが重要だ。

お笑いマジック

観客が笑ってくれるからと喜んではいけない。観客に笑われているかも知れないのだ。

テレビで種明かし番組が多い昨今

そのような番組はすぐにネタがつきるに決まっている。マジックは種を明かして面白いようにではなく、隠して面白いように作られているのだから。

ウォレットからパケットを取り出す理由

そんなことは考えるな。観客はただ数枚のカードを取り出したと思うだけだ。

人と違うことをやれ

これは必ずしも正しくない。素晴らしいマジシャンとそっくり同じにできるとしたら、それは素晴らしいことではないか。

強力なミスディレクションは強力な不思議さを生む

これは観客が近くにいる場合に言えること。少し離れたところから見れば、強力なミスディレクション動作は丸見えなのだ。（あるテレビディレクターがマジックバーに出演者探しに行ったときのこと。少し離れて見ていた彼には、すべてのマジシャンが下手に見えたそうだ。バーマジシャンは強力ミスディレクション多用癖がある）。

パチンと弾くダブルリフトはよくない

と言った本人が、そのやり方をやっていたのを見た人がいる。それを本に書いた誰かさんも、いまは考えが変わったそうである。

マジックの目的は人々を楽しませることである

その通り。だから下手なマジックはやらない方がよい。

インターネットはマジックを売る人にも便利、買う人にも便利

売る人は広告費がかからない。買う人は映像を見て種がわかるので無駄使いせずに済む。

笑顔が大切

笑顔とは笑い顔ではない。明るい顔つきのことである。これを勘違いするマジシャンが多い。理由もないのに笑い顔をされたら、見ている方は気持ち悪いのだ。本当にこれに気づかないプロが多い。明るいのと笑っているのとは違うのだ。やたらに笑うな！

舞台芸では引っ込みが大切である

それは間違いない。早く引っ込めと思っている客もいるのだから。

＝　私の冗談もこのぐらいにして、引っ込みます　＝

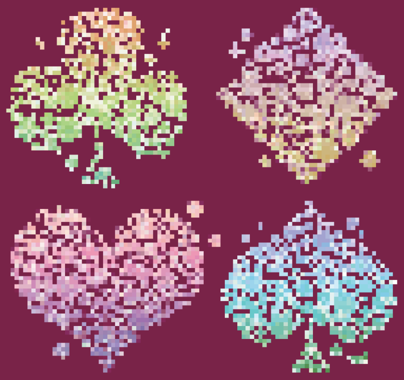
加藤英夫のホームページ

http://www.magicplaza.gn.to/

Card Magic Magazine 第 8 号

発　行　2012 年 12 月 2 日

著　者　加藤英夫

発行者　加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp